

明見彦山古墳群は高天ヶ原山と呼ばれる高知平野南部に位置する独立丘陵の北東に伸びる尾根の麓にあり、小蓮古墳や舟岩古墳群など大型古墳が築造された場所からはやや南に離れた位置にある。とくに1号墳は、上記の南国市小蓮古墳、高知市に所在する朝倉古墳と共に土佐三大石室の一つに数えられる大型古墳の一つである。3号墳は1号墳と同じ谷にありながらも、墳丘・石室の規模は小さく、石室形態は大きく異なるので、両者の関係が問われるところである。

(耕家)

2 調査の経緯と経過

これまでの調査 明見彦山3号墳はこれまでにも人の手が入っている。第Ⅲ章で取り上げる『明見文化史』などによれば、1940年以前は豪道こそ露出していたものの、玄室は閉塞されたままであったようである。玄門の閉塞石の隙間から棒を差し入れた者もあったようであるが、1940年（昭和15年）まで玄室は未盗掘であった可能性が高い。1940年（昭和15年）に地元高校教諭の指導によって調査が行われ石室が開口し、玄室の内容が判明した。この時にさまざまな遺物が出土した。その内容は第Ⅲ章に譲るが、出土遺物は散逸したようで現存しない。この調査の後、岡本健児らが略測を行った以外は調査が行われず現在に至っている。

調査の経緯 土佐には畿内系横穴式石室が主流を占める中で、明見彦山3号墳は玄室長が短い上、櫛石を有するという点で、他の高知の横穴式石室と異なる特徴を持つ。南国市蒲原山東1号墳（廣田1979）などもこれに類する古墳と考えられるが、現存しておらず調査当時すでに天井石は失われていた。すなわち明見彦山3号墳は高知において特異な石室であり、なおかつその形態をよくとどめている古墳といえるのである。また、石室とともに墳丘も保存状態が良い。それにもかかわらず、精密な墳丘測量図・石室実測図は作成されずにいたのである。これまでに公表されている石室図面（岡本1966）は右側壁が省略されており、方位とスケールにも誤りが認められた。

地元には明見古墳保存会があり、本古墳は1号墳とともに地域から大切に扱われている。古墳の保存と活用を行うためにも基礎的資料の作成は重要である。以上のようなことから調査が



図3 調査風景



図4 調査中の1コマ

必要であると考えた。さいわいにも高知県中東部の古代遺跡をデータベース化する事を目的とした研究プロジェクトが2009年度学長裁量經費に採択されていたので、資料収集の一環として調査を当經費で行うこととした。調査は2009年3月5日から12日までである。調査参加者は例言に記したとおりである。

(清家)

参考文献

- 岡本健児 1966『高知県の考古学』吉川弘文館、東京
廣田典大 1979「南国市蘆原山東一号墳・二号古墳の調査概報」『高知県文化財調査報告書』22 高知県教育委員会、高知：pp. 4-26

第Ⅱ章 調査成果

1 古墳の立地

明見彦山3号墳を含む明見古墳群は、南国市明見字彦山の斜面上に所在する。明見字彦山は南国市西部にある高天ヶ原山の北東部に位置し、現在の高知市と南国市の境界付近にあたる。明見彦山3号墳は、北東にのびる尾根の先端部分に位置する(図5)。3号墳から南西へ約200mの地点、尾根の南斜面裾に明見彦山1号墳(高知大学2006)が存在する。また、1号墳の東には2号墳があったといわれているが、現在は破壊されており、その規模や形態を把握することは難しい。

明見古墳群が所在する地域は高知県における古墳築造の中心地である高知平野北東部から少し離れた場所にあり、高知最大の規模を誇る南国市舟岩古墳群や、明見古墳群に隣接する高知市高間原古墳群、あるいは明見彦山3号墳と石室が類似する南国市蒲原山東1号墳との関係も問われるところである。

(清家)

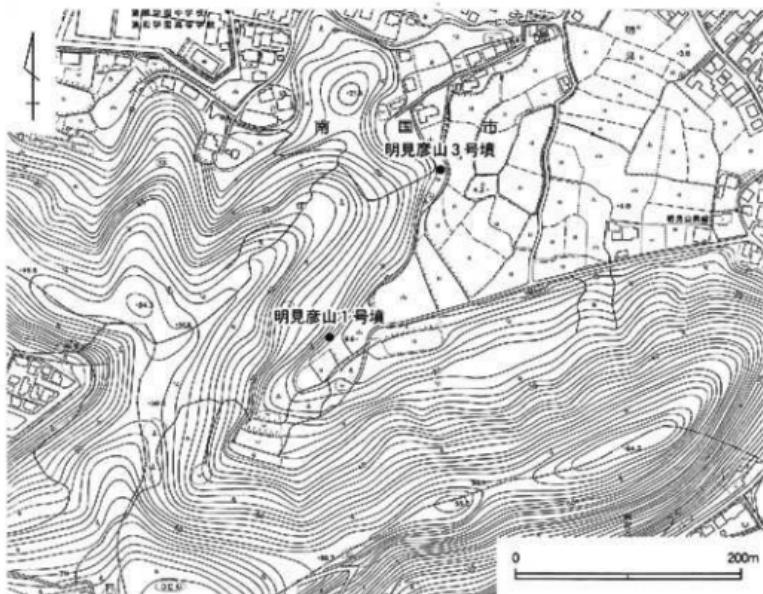


図5 明見彦山3号墳の立地

2 墳丘測量の成果

明見彦山3号墳は、高天ヶ原山から北東にのびる尾根の先端上にある(図5)。墳丘の西側にはその尾根を横断するように幅約1m程度の道が切り開かれており、このことにより墳丘の西側は崖面をなしているが、ほんらいは尾根が続いているのであろう。墳丘の南側と東側には江戸時代から続く墓地が作られている。墳丘の北側はやや急な下りの斜面に続いている。

測量は、石室渓道前のC1を原点(0,0)、玄室内のC2(3.500,0)としたローカルな座標を設定して閉合トラバースを組み、平板で100分の1のスケールの図面を作成した。なお、墳丘の北側にコンクリート製の永久杭(K1・K2)を地権者の許可を得て設置した。それぞれの座標は、K1(7.147, 5.475)、K2(9.473, 4.083)である。K1のレベルはT.P.+11.608である。再調査あるいは発掘調査の参考にされたい。

墳丘は比較的よく遺存しているようであるが、上述した墓地によって、部分的に削平を受けている。石室はおおよそ南に開口しているが、石室が開口している南側は墳丘の上部から崖面をなしており、この部分は墓地を作る時に削られたものと推測できる。ただ、石室渓道に大きな損壊は現状では認められないので、その破壊は大きくなかったものと思われる。墳丘の東側も墓地によって墳丘裾が削られて、裾部が崖状を呈している。これに対し墳丘北側と西側は北

東部の一部を除いて改変の痕跡がなく、墳丘の原状をよく反映していると思われる。等高線を見る限り本古墳は円墳である可能性はきわめて高い。等高線は13.750mまでが円形を呈し、13.500mの等高線は西側で墳丘の外側へ出てしまう。このことから13.500～13.750m付近が墳丘裾と考えられよう。ただ、石室玄室床面が12.520m、渓道部床面が12.900～13.300であるので、渓道部床面と玄室床面が墳丘裾より低くなってしまう。このことは、渓道部床面が玄室より一段高いこと、渓門にむかって渓道部床面の高さが上がってきていることと関係するのかもしれない。現段階では、墳丘測量図の等高線を評価して、墳丘裾部を13.500～13.750mの

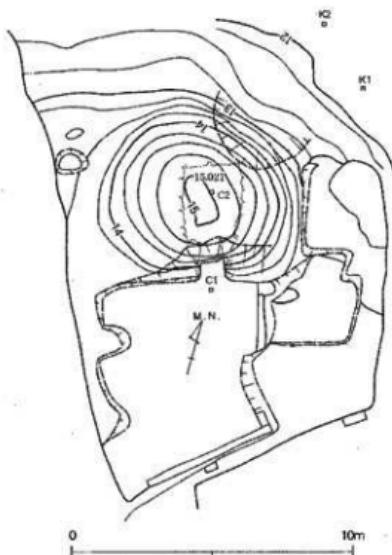


図6 明見彦山3号墳墳丘測量図

地点に考えたい。そうなると直径は約7mであり、現状の墳丘高は約1.3~1.5mとなる。段築について、等高線の粗密や現地での目視では確認できなかった。

(清家)

3 石室実測の成果

石室の規模は現状で、全長4.15m・玄室長2.70m・玄室幅2.00m（奥壁付近）・1.65m（玄門付近）・玄室高1.75m（奥壁付近）を測る。羨道は、長さ1.45m・幅0.75m（玄門付近）・幅1.05m（開口部付近）・高さは現状で1.0mであるが、後述するように羨道部に置かれている石材のうち、もっとも上にあって地表に露出している石材は玄門の閉塞石である可能性が高い。この石を取り除くとおそらく羨道の高さは約1.2m程度であったろうと思われる。

石室の開口方向は、玄室の主軸を基準とするとS-16°48'25"-E方向（磁北）である。両袖式であり、袖石は羨道部でせり出さない。玄門部の天井石は、羨道部より一段下がる。いわゆる疑似樋石状を呈している。羨道部は玄門から開口部に向けて「ハ」字状に広がる。羨道部に長さ90cm・幅55cmの石が置かれている。1940年の発掘調査に参加したことのある地権者の話によれば、玄門の閉塞石であるという。1940年当時は閉塞石として樋石に立てかけられていたようであるが、調査時に外され床面におかれたものであろう。1940年時の閉塞石の写真（図7）をみると現在床に置かれている石と形状が似ている。閉塞石と思われる石のさらに下にある石から樋石まで高さが約80cmであるので、長さ90cmのこの石は閉塞石として十分機能することが分かる。よって、この石は閉塞石と認めて良い。

玄室床面は羨道床面より1段下がる。玄室からみれば羨道部に向かって1段ステップがあることになる。このステップは石が2段積まれている。ステップの高さは現状で25cmである。

両袖部は、ステップを形成する石材の上に3段の石を積む。

玄室のサイズは前述したとおりである。奥壁と側壁最下段の平面形は、玄室の長さは幅よりもやや長い程度の長方形である。奥壁部分より玄門付近の幅が狭く、奥壁から3石目までは玄室幅は奥壁付近とほぼ同じか、若干広がるようになっているが、奥壁から4石目から玄門にかけて玄室幅は減じている。

玄室奥壁は、基底石としてやや大きめの横長の石材2個を右側壁⁽¹⁾に寄せて設置する。左側壁との間にできる小さな空間に縦長の石を置いている。その上に塊石とやや横長の石材を7段積んで奥壁を作っている。奥壁下部はほぼ真っ直ぐ積まれているが、上半部は内側へ持ち送られる。

玄室左側壁の基底石にはいわゆる腰石と呼



図7 石室開口前の閉塞状況

ばれるような特に大きな石を使用しない。主に高さ20cm程度で長さ40cmの石材を横長に配置する。基底石の上に5~7段の石を積み上げて壁体を構成している。玄室右側壁も基本的に左側壁と同じである。基底部には横長の石を6石配置し、横長の石材を5段積む。基底石は直立しているが、2段目から天井石にむかって急角度で持ち送っている状況が観察できよう（図9）。

基底石より大きなサイズの石は、右側壁では3段目に左側壁では2段目あるいは3段目に積まれているのが特徴的である。特に右側壁3段目の石は奥壁から玄門に向かってややレベルを挙げながらも、石の上面が面を描えていることは注意を要しよう。この面は、袖部と羨道部の下から2段目の側石上面に続いている。奥壁においてもこの面は続くようで、標高13.3~13.4mで面が壠っており、左側壁3段目の石に続く。左側壁では石の上面が描うラインは明瞭ではないが、玄室においてはやはり下から3段目で上面の高さを揃えているように感じられる。石室構築にあたりこの面でいったん高さを揃えていたのではないかと考えられる。

玄室の天井石は4石で構成される。基本的に平天井である。羨道部の天井は玄室よりも1段低くなっている。羨道部の天井石は現状で1石存在する。

なお、墳丘測量中に墳丘南側の墓地より須恵器1片を採集している。須恵器は斐の胸部片と思われる。小片のため図化はできなかった。

明見彦山1号墳と3号墳の石室 同じ谷に位置している1号墳石室（図8）はいわゆる畿内系横穴式石室である。3号墳とは形態が大きく異なる。この2者はどのような関係にあるのであろうか。1号墳石室からは須恵器と土師器の小破片が知られているが、その時期は不明であ

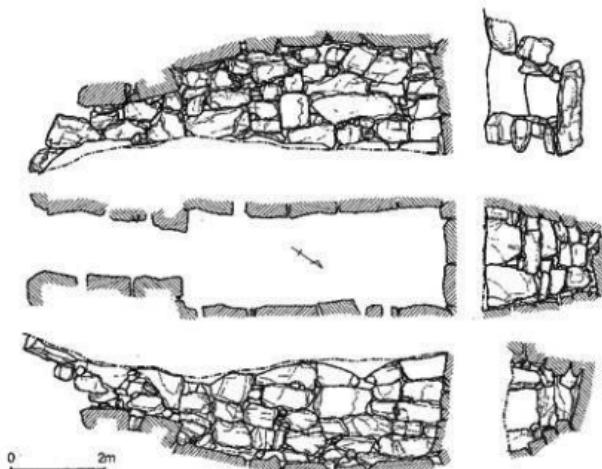


図8 南国市明見彦山1号墳の石室

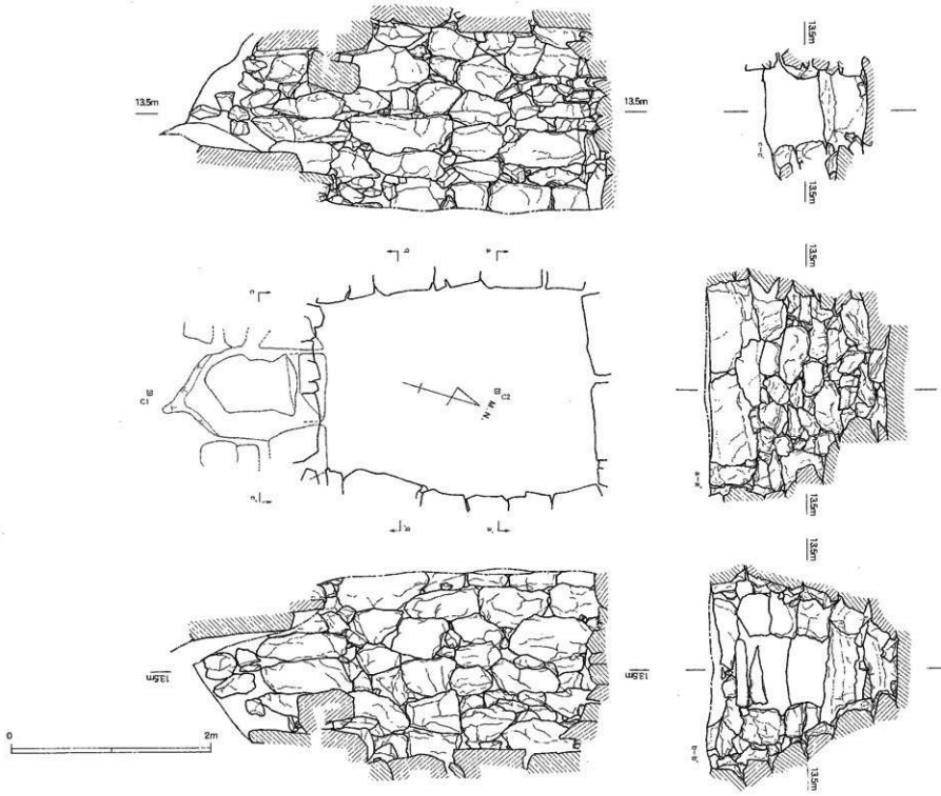


図9 石室実測図

る。3号墳の出土遺物は現存していないので、これも細かな時期を決めることが困難である。つまり、両者の差異を時期差に限定することはできない。ただ、両者の形態は大きく異なるけれども細部において類似する点もある。

まず側石の積み方である。基底石に横長の比較的小振りな石を置くことは両者に共通する。また下から3段目に大きな横長石材を積んでいることも共通するのである。また、奥壁基底石も基本的に2石で構成され、幅が足らないところは小さな石で補填する点も共通する。

石材の積み方という細かな点が似ていることは偶然とは考えがたい。とくに基底石は壁体をえる重要な石材である。基底石に安定する大きな石を使わず、3段目に使用するのは造墓に関わった人物や集団の痕と言って良い。両古墳は同じ造墓集団が関わった可能性が高い。

明見彦山3号墳石室の類例 土佐では畿内系横穴式石室が主流を占め。3号墳石室のように玄室の長さが短く、楣石を持つという構造の石室は知られていないかった。しかし、今回の石室実測図を他の古墳と比較したところ、南国市蒲原東1号墳石室（図10）と石室形態が類似することが明らかとなった。蒲原山東1号墳は1975年に高知医科大学建設に伴って調査が行われた古墳である。石室の上部は既に失われており、玄門部の構造も不明な点が多いものの、明見彦山3号墳と類似点が認められる。玄室長はやや明見彦山3号墳より長いものの、玄室幅が奥壁から玄門にむかって減じる平面形や幅の狭い狭道、狭道床面より玄室床面が1段低い点も共通する。玄室奥壁の石材の置き方も明見彦山3号墳と類似する。天井の構造は不明であるが、蒲原山東1号墳は明見彦山3号墳に類する石室であったのではなかろうか。蒲原山東2号墳の石室は大きく損壊した状態で発見されて詳細は不明であるが、蒲原山東1号墳の付近に存在することや小振りな石室であるので、これも明見彦山3号墳に類する石室であった可能性は高い。

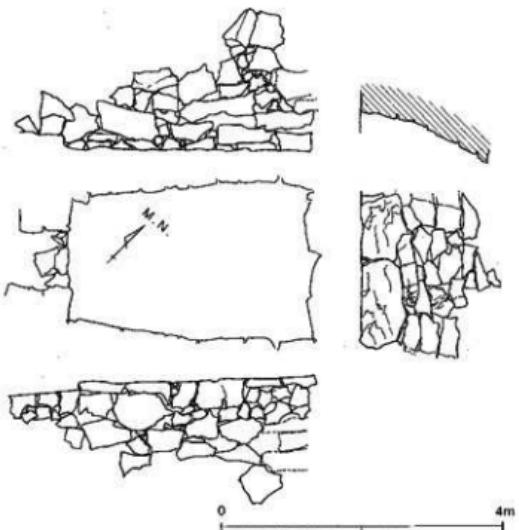


図10 南国市蒲原山東1号墳の石室

(清家)

注

(1) 石室の左右は、奥壁から羨道を見た場合の方向を示している。

参考文献

高知大学人文学部考古学研究室(編) 2006 「南国市における大型後期古墳の調査」高知大学人文学部考古学研究室、高知

挿図出典

図9：明見彦山1号墳：高知大学人文学部考古学研究室(編) 2006 (前掲) (再トレース)

図10：廣田典夫 1979 「南国市蒲原山東一・二号古墳の調査概報」『高知県文化財調査報告書』22 高知県教育委員会、高知：pp. 4-26 (再トレース)

第Ⅲ章 『明見文化史』における明見彦山3号墳の記述

1はじめに

明見彦山3号墳が1940年（昭和15年）まで未盗掘であった可能性があり、この年に地元高校教諭によって調査が行われたことは第Ⅰ章に記した通りである。数多くの副葬品が出土し、とくに2頭の鹿の像を持つ子持壺が出土していることは『南国市史』（廣田ほか1979）などでも記されるところである。しかし、現在はそうした遺物は散逸し、出土遺物の種類や数は正確には分かっていない。当時の調査のようすもよく分かってはいない。

しかしながら、明見彦山3号墳の地権者であり、当時の調査にも参加していた浜田栄一氏より松村義正編『明見文化史』ならびに同編『明見文化史第五回』なる資料の複写を見せていただいた。当時の調査に関する記録がきわめて詳しく記載されており、明見彦山3号墳を理解するきわめて重要な資料であることを認めたのであった。そこで、明見彦山3号墳ひいては高知の古墳時代を理解する資料として重要であるので、この2つの文書を本書に再録することにした。

この2つの文書の編著者である松村義正なる人物は、地元の郷土史家であったようである。『明見文化史』のはしがきに昭和38年9月で78才とあるので、1885年（明治18年）生まれであろう。現在は故人となられたと聞く。『明見文化史』はA4サイズの400字詰め原稿用紙を基本にして縦書きで書かれており、自筆の原稿以外に地元の歴史に関わる新聞記事・写真、山典は分からぬが何かの広報誌の記事などが添付されている。執筆年代は明らかではないが、特定の期間に執筆を行ったのではなく、随時原稿を書きため、新聞記事を貼り付けるなどして作成されたようである。私が見た中で、1936年（昭和11年）7月の記事が最も古く、1967年（昭和42年）5月31日の記事が最も新しい。表紙には、昭和40年3月、はしがきには昭和38年9月の日付があるが、いったん完成した後も、何度も改訂して現在の形になったものと考えられる。後に再録したものをご覧いただければ分かるとおり、明見彦山3号墳に関わる記載の量は多くはない。ただし、子持壺の詳細なスケッチ（図11）があり、子持壺の詳細を知るのに重要である。

『明見文化史第五回』は要線が描かれただけの便せんのような紙に縦書きで記載されている。全体をみたところこちらの方が作成年代は古そうである。中に、1952年（昭和27年）10月の記事と1934年（昭和19年）1月の記事が貼付けられている。明見彦山3号墳の記載もこちらの方が詳しい。調査に関する記述もきわめて具体的である。3号墳の発掘記録に関しては、『明見文化史』にも重複した記載があるが、『明見文化史第五回』の内容を書き写していることがわかる。『明見文化史第五回』が先に成立して『明見文化史』が後からできたのは間違いない。

これらの文書にある「明見彦山の古墳」や「彦山南麓の塚穴」とは、石室のサイズや地権者などから考えて明見彦山1号墳のことであり、「明見字彦山東麓古墳」は3号墳のことである。

『明見文化史第五回』によれば松村は以前から3号墳の調査を希望しており、地権者にもその意志を伝えていたが果たせず、県立農業高校教諭の指導で発掘している噂を聞きつけ、その調査を見学したという。『明見文化史第五回』には「人体の匍匐して入る程に開墾し（中略）残存せる土器、鉄片など一々最も丁寧に発掘しては取り出した。」というきわめて具体的な記述があり、見学してからその興奮が冷めないその日に文書を認めたことがわかる。

調査は1940年4月25日に県立農業学校の武田某氏によって実施され、その生徒数名と村人數名がそれを手伝ったようである。生徒の1人として名前が挙がっている浜田栄一とは、現在の3号墳地権者であり、当時の地権者の孫であった。1940年は皇紀2600年に当たり、古代の关心と顕影が高まった時期である。そういう経緯から生徒の教師であった武田某氏が調査を行ったものであろう。

発掘の経緯やその状況だけではなく、1940年時点では開口しておらず未盗掘であった可能性が高いことがわかる。さらに重要なことは出土した副葬品の記述とそのスケッチ（図12）である。この記述とスケッチによって3号墳の副葬品がどのようなものであったか、おおよそ理解できるであろう。図12では子持壺の詳細はよくわからないが、『明見文化史』掲載の図11は細部までよく描かれており、参考となる。

現存する1号墳と3号墳だけではなく、2号墳についても貴重な情報がある。『明見文化史第五回』の欄外頭注（本書の注（1））には、2号墳石室が窓の壁体に用いられるために破壊されたことが記されている。また2号墳の位置は不明確なところもあったが、「案内図」（図17）と称する図面では1号墳の横に、内側に斜線を引いた白丸が描かれている。これがおそらく2号墳のことと思われる。

『明見文化史』・『明見文化史第五回』とともに大部なものであり、すべてを本書に収録はできないので、明見彦山1号墳・3号墳に関わる部分のみ収録することとした。もともと手書きの資料であるので、欄外に頭注や付記が書かれていたり、本文中でも1行を2行に割って書き込んでいる箇所がある。欄外の注や付記は、それが書かれている箇所に相当する本文に注番号をつけて注に示した。また、割注は本書では1行に改めている。図表番号とキャプションは本書の編者である清家が付けたものである。清家が補足的に注などを記す場合には「（編者注）」とその度に記入した。

(清家)

2 『明見文化史』

明見字彦山東麓古墳の発掘

(第三号)

一、所在地 長岡郡大篠村明見字彦山一、一二五番地山林六畝歩ノ内、浜田徳次郎所有地、同家累代墓地ノ背後ニ在ル小丘。丘由上雜樹密生ス

一、発掘年月日 昭和十五年四月二十五日

午前細雨、午後晴

発掘時間、午後二時半頃ヨリタ方始

一 発掘探究者 探究指導者 県立農業学校武田教諭（千葉県人）

及随伴者 発掘者 同校生徒浜田栄一外一名

随伴者 長岡村ノ人一名、寫真撮影者生徒一名

発掘中現場立会人松村義正。 手傳人 男女五名

発掘日記

松村義正

今日（昭和十五年四月二十五日）彦山東麓の古墳を農業学校の地歴科担当の先生と生徒とが明見に来て同所山林所有者の許可をうけ発掘しているが、種々の土器、つぼ、や鐵鎌、刀剣、鉄片、人骨片が澤山出ているとの報があったので私は、平素この塚を発掘してみたいと思っていたこととて早速、程遠からぬ現場に駆せつけすでに発掘中の現場で出土品の数々を見る（人骨片は見えなかつた）。武田先生に挨拶して出土品の存在所の位置その他土器の年代など御説明を聞き、思いは遠く二千年的昔に遡り上古時代の遺跡を追憶するものがあつた。得がたき考古の資料の多く出土した事を喜び且つ先生らの今日の勞に深く感謝した。我が國原史時代の遺跡である古墳が当部落内に所々存在している

事を思うと、当時の文化も余程進歩してい
たであろう。

本古墳も亦彦山南麓第一号の塚穴と同じく、貴人の墳墓であった。形式は土佐に多く存在する円墳で、昔は開口していなかつたが、私共知った頃より小丘の南方に小口があることを認めた。発掘前は探求者が度々杖など突っ込んだことであった。

塚穴内の構造は彦山一号古墳と同一型であるが、規模は稍々小である。然し年代からいふとこの二号古墳は一号古墳よりも古いらしい。

（発掘中の写真7枚がここに掲載。複写を重ねてあるため像が鮮明でないので省略：編者注）

日本の古墳時代（関西大学教授末永先生



図11 挿絵1（子持壺）

談 権原考古学研究所長)

日本の古墳時代は、五世紀を中心にして前後三百年余りづき、古代前期におけるわが文化の最も充実した時代である。

すでに大陸との国際関係も密接となり、その影響もあっていろいろの面における発展が見られ、現代日本文化は一応この時期にその基礎が固められた。

古墳はほとんど日本全土に分布し、その中には“千塚”という群集墳がある。たいていは小規模の盛り土をした円墳が多いのだが、ときまた小さい前方後円墳や四角な古墳(方墳)がまじっていることもあって、あるいはそれが群集墳の中心になるらしい。

3 『明見文化史第五回』

○妙見山の塚穴(現在空虚の石窟なるも上古時代の古墳也)⁽¹⁾

塚穴の遺跡は有史前後史料缺乏せる時代の真相を闇にするに足る古墳の存在により此の明見は上古既に文化的な発展のありし土地たりしことを證するものにして歴史上最も貴重なる遺跡である。「附記」左記古墳の外、明見字茶臼峯(通称勝がヶ森)の頂上に壇ケ所圓墳あり。(未発掘)
 ○明見彦山の古墳、『道案内』縣道又ハ電車道ヨリスレバ明見橋ヲ渡リテ南へ入り明見部落ノノ西方地蔵堂ノアル一小丘ヲ越シ山裾ヲ西ニ入り込ンダ猿川谷ト云フ谷間ノ北壁、山田ニ接シタ小灌木密生ノ字名ヲ彦山ト云フ山麓ニ在ツテ南面シテ居ル(此ノ石窟ニハ火蝠蝠ガ多ク隠栖シ居ルノデ余等小供ノ時ヨリ捕獲ニ行ツタ)

本古墳も小蓮古墳、朝倉(宮ノ裏)古墳と共に土佐に於ける代表的なものである⁽²⁾、と云はれて居る。明見字彦山(一、一二七〇二 山林貳反六畝拾七歩濱田金次所有の内)と云ふ山林の麓に在る。雜木林に蔽はれた高さ十五尺の圓墳で、南方に入口あり匍匐して漸く狹道をくぐることが出来る。狹道の入口は幾分の崩壊をしてゐるが残存の屋根石は武枚である。現今出入し得らるゝ狹道中間の高さは三尺八寸、中入口(狹道中間)の高さ二尺八寸、幅三尺を示し右に一尺二寸、左に一尺の開きを見せて玄室に入ることが出来る、その構造は左の如くである。

狹道長七尺四寸 幅三尺八寸 玄室屋根石武枚

窟内(玄室) 実行長拾八尺六寸 高サ七尺五寸 上幅 参尺參寸 下幅 七尺

窟内屋根石 五個、奥壁、及東西両壁ハ數個ノ石積ミカラ成ツテ居ル、(武市建山翁調査記録ニヨル)

本古墳は(塚穴としては)相當大きもあり、又、比較的完全に残存して居る部類に属すと云ふ、蓋し太古の神墳墓にして石廊の前面の開きたるにより自然中虚の石室を生じたものである。『附記』前記彦山古墳の外に尚ほ彦山の東麓⁽³⁾(濱田徳次郎所有山林内墓地ノ北隅明見字彦山一、一二五 六畝歩ノ内(山林))にも小丘をなしたる塚穴(円墳)形がある雜木密生してゐる、發掘して見たいものである⁽⁴⁾。又、明見字狸岩(狸岩ノ上及西側ノニケ处)に

も古墳があつた、場所は彦山の古墳より南へ上つた丘陵（明見共有山、現在開墾畠地）で二ヶ所もあつたのである（両処ともに堅穴に石蓋をせり）~~下~~下墳は人正十年の頃にや当地荒川茂吉氏が畠口開墾の際発見したもので、~~渠道も~~去室も土砂に埋没されて居たる堅穴であつて底には一面に川原石を敷きつめてあつた、塚内の規模は小でこの時大型の壺と祝部土器が出土した。斯道の研究家中城先生と武市建山（武市佐市郎）翁の両氏この時々高知より見に来られて種々調査せられ余も亦扈從して荒川氏が古墳発掘の現場及び壺、土器を見せて貰ふた。（祝部土器、或は弥生式土器にてはあらざりしか？）

此の時掘出した祝部土器は現在懷德館に陳列されてあると思ふ

昭和三年一月三日調査

妙見彦山の塚穴 入口 幅三尺五寸 高サニ尺五寸 奥行 長二十六尺（羨道七尺四寸 玄室共十八尺六寸）

上幅四尺 下幅六尺六寸 高サ七尺五寸

コレハ余ノ調査デアツテ武市先生ノ御調ベトハ寸法ガ聊カ相違シテ居ルガ参考ノタメ記載シタ
○明見字彦山東麓古墳の發掘 昭和拾五年四月廿五日⁽⁶⁾

一、所在地 長岡郡大穂村明見字彦山、一・二番地山林六畝歩ノ内浜田徳次郎所有地、同家
累代墓地ノ背後ニ在ル小丘、丘上雜樹密生ス

二、發掘年月 昭和十五年四月二十五日 午后二時半頃ヨリタ方迄 午前細雨 午後晴

一、發掘探究者及隨伴者 探究指導者 縣立農業學校 武田教諭（千葉縣人）

発掘者 農業學校生徒濱田榮一（山林所有者浜田徳次郎氏ノ孫）

外生徒壹名、隨伴者 長岡村ノ人宅名、寫真撮影者 生徒壹名

發掘中現場手傳及見物者、男女五名（余モ亦此ノ中ノ一人ナリ）

今日（四月二十五日）彦山東麓の古墳を農業學校の地理、歴史科担当の先生と生徒とが来て⁽⁶⁾⁽⁷⁾、山林所有者の許可を受け古墳を發掘して居るが種々の上器、壺、や鐵鎌、刀劍、鐵片、人骨片、が澤山出て居るとの報があつたので余は平素此の塚を發掘して見たいと思ふて居たことゝて早速、程遠からぬ現場に馳せ付け發掘中の現場、出土品の數々を見る、武田先生に挨拶をして出土品の存在所の位置其他上器の年代など御説明を聞き、思ひは遠く二千年前に遡り上古時代の遺跡を追憶するものがあつた、得がたき考古の資料の多く出土した事を喜び且つ先生の今日の勞に深く感謝の意を表するものである。

本古墳は昔より大津城主天竺氏の戦死の塚とか或は上古貴人の塚とか傳へられ所謂謎の塚として聞えたるものであつて、余は所有者濱田徳次郎氏に何か財寶が出るかも知れないから是非とも發掘して見ては如何と談合してみた事があつたが未だ果さず、今日に及びたるも、計らずも武田先生のお蔭によりこの塚を發掘して下され壹千貳百年以上を経たる古墳があつた事を確かめ得たと共に考古の資料を眼前に陳列し見ることを得たることを又、厚く感謝するものである。



図12 拝繪2 (明見彦山3号墳出土遺物)

我が國原史時代の遺蹟である古墳が当部落内に所々存在して居た事を思ふと当時の文化も餘程進歩して居たであらふ。

本古墳⁽⁸⁾も亦彦山南麓の塚穴と同じく我が國上古時代の遺跡であつて貴人の墳墓であつた事は申す迄もない、形式は土佐に多く存在する圓墳である、昔は全く開口して居なかつたが余等の知れる頃より小丘の南方に小口があることを認めた、探査者が度々杖などを突っ込むことである、発掘はこの稍々開口せる淡道入口の石垣を堀り除けて人體の匍匐して入る程に開鑿し玄室に二、三人入つて残存せる土器、鐵片など…最も丁寧に発掘しては取り出した。塚穴内の構造は彦山南麓の古墳と同一型であるが、その規模は稍々小である⁽⁹⁾、この発掘により謎の塚は上古住人の中、貴族の墳墓であつたことが明了となつた譯で、其の時代を尋ねると当地方の如きは土佐僻遠の地であるから文化がずっと遅れて居たであらふから土佐國府廳即ち紀貫之國司時代より以前、奈良朝の末期から平安朝の中期迄の遺蹟であると思ふ、参考のため當時の年代表を次に記載する

(表は省略：編者注)

寛に遠く壹千貳百年以前⁽¹⁰⁾の大昔、此の明見地方は當時、文化の中心地であつて幾多民族の集団住居せしものであらふ、何づれ斯道の研究者により年代が出土品各種の材料に依つて推定發表さるゝことであらふ、この円墳の規模も亦壯大であることを思ふと當時尊祖の美風の跡が偲ばるゝ。今後尚精密に探究せば考古資料として價値あるものが出来るかも知れない⁽¹¹⁾。

出土せる祝部上器（手持高輪裝飾付青銅、壙、盤、德利形壺、高環）其他、勾玉、管玉、鐵鏡、鐵兜馬具、耳環、刀劍、等左圖（図12：編者注）の如し

弥生式土器⁽¹²⁾は特色として赤色又は赤褐色であるが、祝部上器は青銅色である⁽¹³⁾。この土器は今より幾千年以上の昔のもので弥生式は神武天皇の大和奥都の前後已に日本人によりて使用せられたものであり祝部式はその次ぎである。爰に角原史時代の代表的遺蹟である当部落彦山南麓の古墳から出土したものである。即ち古墳内の隅々に在りし副葬品で生前の使用品又は祭器などである。

光輝ある皇紀二千六百年の今月今日上古時代の遺跡、殘品を見ると誰れか古へを替へざるものあらんや。

いはひべ（忌愛）~~美~~土器（古墳内部ノ玄室中ニ納メタルモノ）

又祝部トモ、青銅トモ書ス、上古神事又ハ日用ニ使用シタル土器、主ニ飲料ヲ入レシガ如シ、今之ヲ各地ノ古墳中ヨリ發掘ス、壺、碗、高环等形状種々アリ、質固ク皆灰白色ニシテ素焼ノモノ多シ、中ニハ稀ニ釉ヲ施シタルモアリ、何レモ軽軟ヲ用ヒシ跡アリ、之ニ類似スル土器ニ

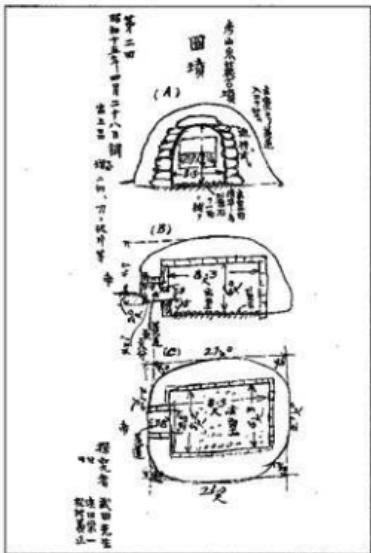


図13 挿絵3 (明見彦山3号墳)



図14 挿絵4 (陶器・玉類各図)¹⁰⁰

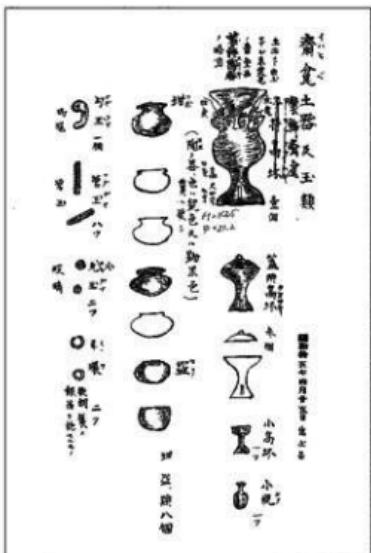


図15 挿絵5 (陶器土器及び玉類)



図16 挿絵6 (1号墳と3号墳の比較)

シテ、内部ニ渦紋アルモノヲ朝鮮土器と稱ス、コレ其様式朝鮮製ニ似タルヨリ此名アリ、又其満紋ハ裝飾用ニハアラズシテ製造ノ際、木片ヲ以テ内部ヨリ押シテツキタルモノナルベシ。

ホビキ (埴輪)、はにわ (埴輪) (古墳ノ表面ニ立チ並ベタルモノ)

日本ニ於テ古墳ノ周囲ヨリ発見セラル、赤焼筒形ノ土器、一見齋免土器 (上器) **ロヒキ**ニ似テ居ル、埴製ニシテ、輪形ニ置カレシヨリ此名アリ、吸水性ノ多キ土製素燒ニシテ、概ネ赤褐色ヲ呈ス、稀ニ鼠色ニシテ、稍々硬キモノハアリ、其種類ニ円筒、土偶、動物、器具等アリ、祝部土器ヨリモ古ルシ、

またがたま (勾玉) 其形巴状ヲナシ、頭部ニ孔アルエ、上代之ヲ絲ニ貫キ、頸、手、足又ハ刀劍等ノ裝飾トナシタルモノ、大サ通常二寸内外、原料ハ瑪瑙、碧玉ヲ常トシ、珊瑚、翡翠ノ属之ニ次ギ、稀ニ水晶、硝子、琥珀、金、銀等アリ、其起源ハ上代人ガ狩獵ニ依テ獲タル獸牙ノ類ニ穿孔シテ、裝飾ニ用ヒタルニ依ルナラント、

注

(1) 妙見山ノ塚穴

現在古墳ノ東側ニ並シテ古墳 (同形) アリタルモ明治四年頃掘出シテ此ノ塚穴ニ使用セル大石材ハ石灰岩ノ集石ニ使用セシト云フ、今日其ノ形跡ノ残レルヲ見ル

明見字彦山一、一二七ノ二山林ノ内

(2) 堀内氏義

古墳文化

古墳トハ土佐デハコレヲ冢ト呼ンデ井ル、古代人ノ生活ヲ現ス遺蹟デアル 我ガ國上古氏族制度ノ行ハレタ墳ノ貴人ノ墳墓デアル、時代ハ石器時代、即チ先史時代ニ次イデ鉄器使用ノ時代ニ入ツタ墳デ原史時代トイヒ我ガ國デハ神代ノ末期カラ大化改新迄デアルガ学者ハ更ニ佛教文化ヲ除イタ飛鳥時代迄ワコノ期間トシテ井ル、然シ政令ガ充分地方ニ及バナカソタ群葬ノ地デハズツト時代ガ下リ土佐ノ如キハ平安朝行ハレタモノデアル。ソノ形式ニハ円墳、方墳、前方後円等アルガ、土佐ノハ皆單純ナ円墳ノミデアル。(土佐考古学会)

(3) 彦山東義に在る古墳の如きものは大庭城主大竹氏の遺蹟即ち墳墓にあらざるか

(4) (附記)

大楠村植部落ニ土佐第一ノ古墳アリト云フ ソノ形式ハ円墳ナリト云フ、

出土品、制幣即チ一文銭二個 元豐通寶、皇宋通寶、元豐通寶ハ宋神宗時代神宗皇帝ノ元豐二年(八百五十年前)ニ鋳造セラレタルモノ

金、銀環耳飾、鐵鏡其他。

(5) 一、石器時代

縄纹式土器

弥生式土器

一、青銅器時代

二、鐵器時代

祝部土器

(裝飾斎差)

(6) 猿岩ノ直ク上ノ古墳跡ヨリ現在祝部土器(壺、坏、壺)ノ破片澤山田上セリ、全所西古墳ニモ土器ノ破片出土セリ

(7) 深尾山ニモ大甕ノ破片出土シタリト云フ

(8) 追持式

石屋造り塚、円塚(円墳)、表道及玄室

(横穴式石室模式圖があるが省略:編者注)

(9) 明見彦山東麓ノ古墳出土品ハ在米土佐ニテ木ダ出土セザル所謂未発見ノ貴重品ニテ武田宗久教諭其他上佐考古學者ノ鑑定ニヨルト

(一) 祝部土器

裝飾スエキ、手持高坏其他須恵器十數点

(二) 鐵製品

劍(直刀)

鈸(倒卵形)

小刀、鍔

馬具、鎧

(三) 實石製

勾玉(瑪瑙)

管玉(硬玉)

等ニテ頗ル珍品多シ 右須恵器ハ新改村須恵部落ノ窯跡出土品ト同ノ如シ

(10) 今ヨリ豊千ニ百年前は

聖武天皇の天平年間

(11) 古墳文化

鐵器使用ノ時代ニ入ツテ古代人ノ造セル最モ顯著ナル遺蹟ハ云フ迄モナク古墳デアル、コノ別ニ至リ宏大ナル
墳塋ヲ有ミ、中ニ石室、石棺等ノ構造ト各種副葬品ヲ收ムル所謂高原ノ形式ヲ生ジタ特ニ美シキ風形ノ墳塋ヲ
作リナセル所謂前方後圓墳ハ古墳ニ於ケル花形トモ云フベシ(日本文化史圖錄)

(12) 附記

弥生式土器発掘ノ地名

(東京本郷口弥生ヶ岡)

発掘・地名ニヨリ弥生式ト云フ仮リノ名ヲ附ス

(今ヨリ三四十年前発掘)

龍河洞ニハ弥生式土器・完全ナルモノ二十有餘個ト鍾乳石ニ掛けマレタル長頸壺ナド有リト云フ、古代民族ノ住居使用セシモノナラン。

(13) 土器ノ種類

網紋式

弥生式

土師器

朱色式

(特徴式又、新様式)

(14) この図は明見彦山3号墳から出土した土器や玉類のスケッチではなく、土器と玉類の一般的解説のため掲載しているものと思われる(編者注)。

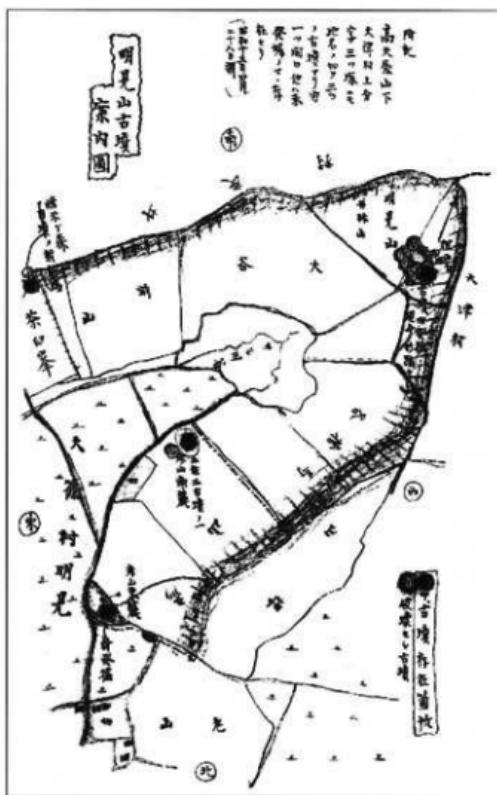


図17 拠検7 (明見彦山古墳案内図)

参考文献

廣田典夫ほか 1979 『南国市史』上巻 南国市、高知

第IV章 まとめ

明見彦山3号墳の存在は、畿内系横穴式石室が主流を占める土佐において、特異な形態の横穴式石室を持つことで一部に知られてはいた。しかしながら、墳丘や石室の詳細な図面はこれまで作成されていなかったので、その存在はあまねくは知られておらず、その石室の持つ意味などは問われずにきたのである。

今回の調査の結果、墳丘は直径7m程度の円墳であり、墳丘は比較的良好に遺存されていることが明らかとなっている。石室は、玄室の長さが短く、壁面も前後左右から急角度で持ち送りが行われる形態をなす。玄室床面は羨道床面より1段低く、玄門には棺石を持つという土佐では特異なタイプの石室であった。

先述の通り、明見彦山3号墳の石室がこうした特異な石室であることは一部で知られていたのであるが、実測図を作成したことでの古墳との比較が可能になった。南国市蒲原山東1号墳の石室は天井部が失われているが、平面形や石材の積み方には共通点がある。蒲原山東1号墳石室は明見彦山3号墳と同類型の石室であった可能性が高い。このように実測図を作成することにより、これまで調査された古墳を再評価することができたことはきわめて有意義であったといえよう。今後は、他地域における石室の比較を行う中で、明見彦山3号墳石室の系譜を明らかにしていく必要があろう⁽¹⁾。

また、同じ谷にある明見彦山1号墳との関係も重要である。1号墳は、畿内系横穴式石室を持ち、墳丘規模・石室規模ともに3号墳を大きく上回る。1号墳と3号墳は系譜を異なる石室を持つのであるが、第2章で示したとおり、石室の構築のあり方には共通点が認められた。このことから両古墳は無関係とはいせず、すくなくとも古墳築造には同じ集団が関わっている可能性が高い。1号墳の細かな時期が不確定であり、3号墳の副葬品も現存していないので時期的差異の可能性もあるが、両者は階層差の可能性が高い。石室の系譜の違いが何に由来するのか、今後深めていくべき検討課題である。

そういう意味で、70年前の3号墳の調査記録を収録できたことは意味があろう。牡鹿・牡鹿像を持つ子持壺⁽²⁾を含め、多彩な副葬品が今に伝わっていないことは返す返すも惜しまれるのであるが、こうした古記録を有效地に活用して、土佐の古墳資料を豊かにすることもまた大切なことと思われる。

(清家)

注

(1) 桥家豈は、蒲原山東1号墳石室と出土鉄鏃を他地域のそれと比較し、香川県綾歌1号墳と岡山県綾山6号墳との関連を説いている(橋家2007)。

(2) 地権者の浜田栄一氏によると、明見彦山3号墳出土の子持扇は、調査者である武田某氏が自身の出身地である千葉へ持ち帰ったものの、その後、ある人物によって高知へ再びもたらされたとのことであるが、現在行方がしれない。もし、この扇に関する情報があれば、ご連絡を賜りたい。

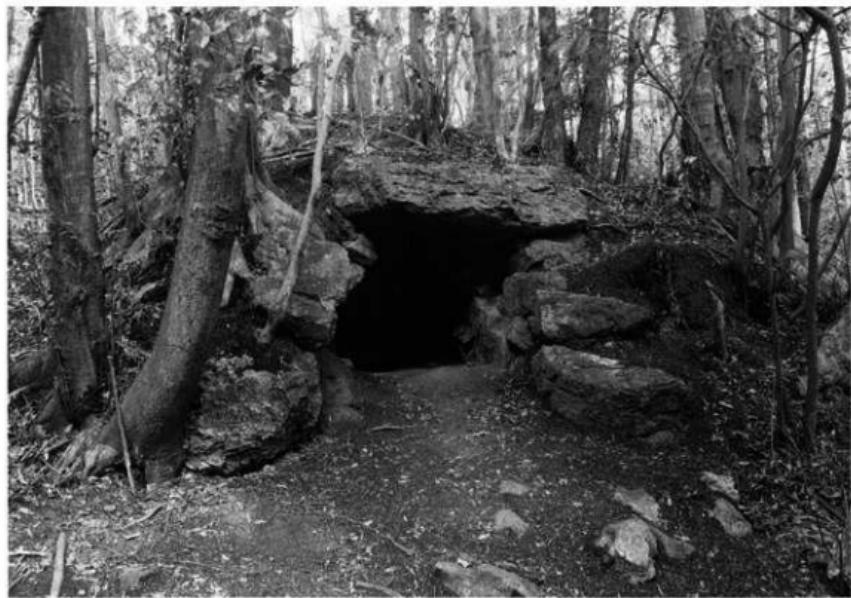
参考文献

- 橋家 勝 2007 「高知平野における横穴式石室の系譜と陪塚構造」『海南史学』45号 高知海南史学会、高知 : pp. 1-12

図 版

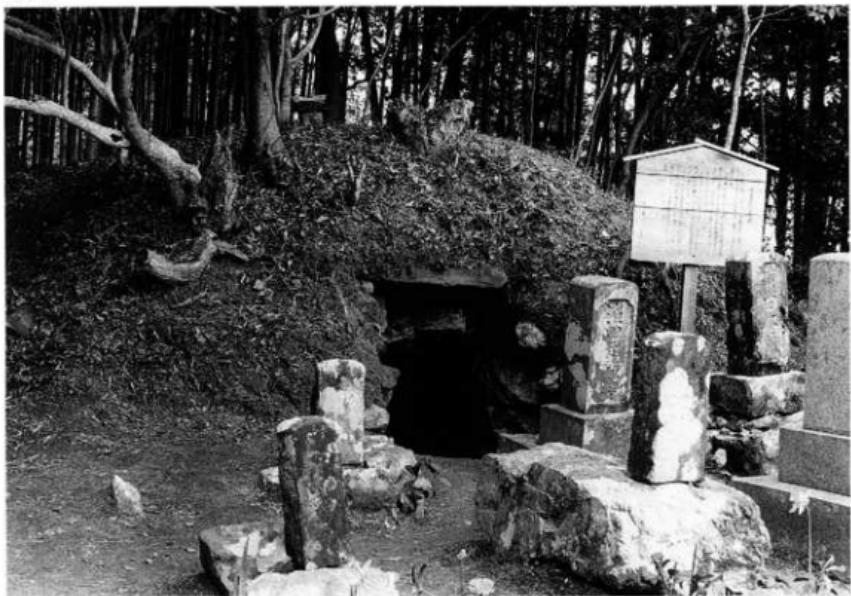


(1) 明見彦山 1号墳と 3号墳の立地



(2) 明見彦山 1号墳

図版 2



(1) 明見彦山 3号墳墳丘南側



(2) 明見彦山 3号墳石室入口



(1) 明見彦山 3号墳石室玄門



(2) 明見彦山 3号墳石室奥壁

図版4



(1) 明見彦山3号墳玄室右側壁（奥壁から）



(2) 明見彦山3号墳玄室左側壁（奥壁から）

弥生・古墳時代における太平洋ルートの
文物交流と地域間関係の研究

2006(平成18)年度～2009(平成21)年度科学研究費補助金
(基盤研究B)研究成果報告書(講語番号18320128)

2010年3月発行

編集 清家 章
発行 高知大学人文社会科学系(人文学部)
〒780-8520 高知市昭和町2-5-1
印刷 有限会社 西村謹写堂
